
告白少女

蒼衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白少女

【Nコード】

N4653V

【作者名】

蒼衣

【あらすじ】

俺はある一夏に、『告白少女』と出会った。告白少女とは、幽霊であり幻でありそして、一人の女の子。少女は出会い頭、俺につきあつてほしいと告白し、その旨を伝える。——「成仏するために、つきあつてほしいんですっ」と——これは恋の物語。暑い夏にあつた、和やかで切ない物語。

その1（前書き）

これは切なめの恋愛ストーリーです。読んでいただけたら嬉しいです。

その1

中学三年の夏。

俺は忘れようとしても忘れることなどできないくらいの、ある出会いはした。

それほど衝撃的で、思い出深い。

今でも何の気なしにふと顔を思い出すことがある。

きまって思い出す顔は、そいつの笑顔だった。

今でも考えることがある。

俺にとってあいつはどんな存在だったのか、と。

夏。

暑くてむさ苦しい、俺の好きではない季節の夏がやってきた。

太陽は皮膚をじりじりと焼き、それでも物足りないのかじつとりとしつく熱を放出している。それに対し木々達はというと新緑色の葉を生い茂らせ、太陽に負けない存在意欲をみせている。風に揺られると同時に葉もなびく。太陽の光をうまく反射させ、きれいな真つ白な光を身につけ体を動かしている。ここで動物たちというと、三十度を軽く超える温度にへばっていた。小動物達は木が作り出した木陰に身を置き、安らいでいる光景がみえる。二匹のリスがまさに仲むつまじく寄り添っているのが、目で確認できる。時たまお互い毛繕いをしたりと、愛らしい姿であつた。

俺も外の木陰で寝転がりてーな！。

先程までの光景は、俺が教室の窓から見ていたものである。俺は窓際の後ろの方の席で、ぼんやり外を眺めるにはベストポジションといえるんじゃないだろうか。ちなみに今は授業中。夏なのにも関わらずカッターシャツを第一ボタンまできっちり閉め、ネクタイまでつけている先生はもはや尊敬する。先生は古典の教科書を教卓のところで広げ、まさに今教科書のどこかにある文章を音読していた。しかし俺は授業に興味がなかった。もはや先生の言葉が何かの呪文の羅列のように聞こえる。俺はめんどくさくなり、頬ずりして自分の席からただただ窓から見える外をぼんやりと眺めていた。

「……………」

空を眺めると薄い青色が広がり、その上にまるでキャンパスにでも描いたかのようなスーっとした白い雲が浮かんでいた。少しずつ形を変形させながら、これまた少しずつ立ち位置を変え、動いている。その雲と空の織りなす不思議だが心落ち着く模様を眺めているのも、悪くはなかった。

ひぐらしが鳴く。かなかなかなと澄んだ声で鳴く。耳に届き、それは俺の心地よいBGMとなり吸い込まれる。

「……………」

なんだか気持ちが良い。俺は自分の意志のまま、心地に任せるようにして瞼を閉じた。

「おい、佐々木」

肩をぽんぽんと叩かれる。

「ん……？」

俺は顔を上げ、まだ眠気の残る瞼を無理に開いた。

「よお、お前授業中によく眠れるなあ」

「佐々木くんは凄いよ」

すると、男が二人自分の机の目の前に立っていた。

男——というか二人とも見知った顔である。どちらも俺の友だちだ。俺の肩を叩き、起こしたのはスポーツマンっぽい、爽やかに野球とかをしてそうな奴。もうひとり俺に尊敬、というか半ば呆れた表情を浮かべた気弱そうないかにも文化系タイプの奴の二人だった。

俺は半目のまま、「まあな」と返す。二人はそれに苦笑したが、しかしいつものことだろう、と軽く流した。

辺りをよく見てみる。

既に教室はワイワイと騒いでいて、何人かの生徒達は鞆を持ち、教室から出て行っていた。俺は理解する。そうか、放課後が始まったのか。それと同時に自分自身に呆れる。俺ってどれだけ寝てんだよ……。そりゃ目の前の二人が呆れるのも分かる。俺は昼一番の授業である五時間目から放課後まで眠りこけていたのだから。

俺は机に俯せになっていた姿勢からむっくりと起き上がる。そろそろ帰る準備をしないと。机に掛けてあったたいして使うことのない鞆を手に持つ。そこで俺の頭の復活を感じたのだろうか、普段からうるさい方のスポーツ男、梶原^{かじわら}が俺に話しかけた。

「あのよ、佐々木。なんと出たんだってよ」

わざと溜を作りながら言う。

「はあ？ 何が」

梶原に俺は怪訝になるほかなかった。いきなりの前振りである。何の内容かも言わずの話である。当然何の話かなんて分かるはずもない。

「梶原くん、それじゃ分かりづらいよ。もつと内容を話さなきゃ」
困った、というかただ意味が分からなかった俺を見て文化系男、やました山下が口を挟む。こいつはいつも助け船を出してくれるいい男だ。
「ちえー、ったくしょうがねーな」

という梶原はいい男ではないだろう。

梶原は次に嬉々とした様子で話し出す。

…ふん、ここは普通に相づちを打つのはなんか癪だな。遊んでやる。そんな俺の考えを余所に梶原は大声で言う。

「だからな、俺聞いたんだよ！　びっくりする驚きのニュースを！」

「お前が裸で学校に登校したことか？」

「違えよ！？　何当たり前に知ってるよ、そんなこと口調で話してんだよ！　つかそんなことしたら警察に一発で捕まるよ！」

「……………」

「何で絶句してんの！？　何で驚いてんの！？　そんなお前にこっちが驚きだわああ！」

「ま、まあまあ梶原くん落ち着いて」

「山下、これが落ち着いていられるかよ！　なんか凄え嫌な誤解されてるんですけど！」

「まあまあ梶原、とりあえず落ち着けよ。ほら深呼吸」

「主犯のお前が言っなああああ！！」

ふーふー、と梶原は荒く息をする。おろおろとしながらも山下は梶原をなだめる。

うん、まあコミュニケーションはこんなもんかな。いつもの会話だ。

俺は一人満足した。

「で、お前一体何が言いたかったんだよ？」

改めて梶原を向いて尋ねる。

「……佐々木が話を逸らさなかったらよかったんだけどな」

ジト目で見られた。が、俺は気にしない。

それを見て梶原はふう、とため息を一つついてから、話し始めた。

「だからな、出たんだよ」

「何が？」

俺が問うと梶原は急に声のトーンを下げる。

「……幽霊が出たんだってよ」

「……は？」

呆気にとられて思わず聞き直してしまう。

梶原の顔を窺った。だがしかし、梶原はいたって真面目な顔をしていた。

「だからよ、幽霊が出たんだって」

もう一度同じ言葉を繰り返す。口調と表情を確認するが、しかし梶原はマジらしい。冗談を言っている風ではない。隣の山下の顔も窺う。こちらも真剣な顔をして頷いていた。

「え、ちょっと待てよ。幽霊なあ？ そんなものいるわけないじゃないかよ」

そう言ってみせるが、二人は応じなかった。「ほんとなんだって」と梶原が繰り返す。俺は無言になる。……これを一体どう理解しろと？ 俺は基本的に幽霊なんてものは信じちゃいない。そんなのは非現実的だと思っている。そんなのを真面目に言われても、言葉を失うばかりだ。確認をするために俺はもう一度訊く。

「幽霊？ あの幽霊か？」

それに二人は大まじめに頷いた。

「……」

返答に困る俺。そこに助け船を出すように山下が言った。

「なんか都市伝説みたいなものだと思っても良いよ。例えばほら……」

……、口裂け女とかオオカミ男とかそんな類だよ」

「都市伝説ねえ……」

言われてもしっくりこない。現実からかけ離れすぎて、あまり考

えられない。しかし俺だって口裂け女とかオオカミ男とかそういう話は一応は知っている。テレビで放映していたのを見ていたこともある。でもそれがこの現実にあるのかと言われれば微妙だ。想像もできないし、したいとも思わない。だから幽霊なんて言われても寝耳に水である。

梶原が声を低くして、あえてぼそりと呟くように言った。

「それが何でも今回は……『告白少女』なんだってさ」

「……………」

「……………」

「……………」じゃあな。梶原、短い付き合いだった」

俺は鞆を持ち、立ち上がったて颯爽とその場を去ろうとする。そこを、

「待て待て待て——！ ちょっと待てって！ 逃げようとするなって！」

梶原が俺の服を引っ掴む。顔が必死だった。

「……………」しょうがねーな」

ストンと俺は自分の席に再び腰を下ろす。無然とした態度でそうしてやった。梶原が俺を見て、また必死に『告白少女』について語り出す。

「これが凄いんだぜ！ 俺たちと同じ年くらいの女の子がな、子どもなら誰かれ構わずに告白をしまくってるって話だ」

それただの告白女じゃねえか。

幽霊でもなんでもないだろう。

「……………」バカバカしい」

嘆息し、また俺は立ち上がろうとする。それを、まあ待てって！と梶原が押し止めた。

「それがな、普通の女じゃないんだって。なんでも話す言葉が訳分からんらしい。所々変な節を感じさせるんだって」

「…それ単に話を通じないだけなんじゃないのか？」

「違うって！　なんかこう、ほんとうに人間っぽくないんだって。話すこともそうなんだが、確かに姿形もそれらしいんだってな。見た人は口々にこれは幽霊なんじゃないか？　というらしいぞ」

「……………」

こいつはもう……。

「なあまず聞けよ梶原」

「何だよ？」

諭すような口調で話を遮る俺にむつとした顔で梶原が応じる。

「それって見間違いかまたは勘違いなんじゃないか？　だって幽霊とか言いながらそれでもそいつらには実体が見えてるんだろ？　声も聞いてるんだろ？　いくらこの世には霊感が強い人がいたって、その人たちが連続であたるわけじゃないか。たまたま、なんて言うなよ？　こんなにくたまたまなんてものはないんだろ？　うからな」

「……………まあ確かにそうだけだよ……」

渋々といった感じに梶原が頷く。

「しかも告白してくるなんて嘘くさいだろ？　どこかの奴らがでつちあげたんだよ、きつと。幽霊をネタにするなんてそんなもんだからな」

「……………そうかなあ」

「そうなんだよ」

俺が言うと、なんだか釈然とせずに梶原は頭をガシガシと掻いた。次に思案顔になって、「ま、そうなんだろ？　なあ」と納得の言葉を吐いた。隣の山下も、若干理解したような顔をしている。ってなんか俺、無意味に偉そうに語ってしまったな……。ま、終わったことは後の祭りだ。気にするのはやめようじゃないか。

幽霊討論の後に梶原がチラッと教室の壁に掛かっている時計を見た。

「やっべ、もう部活の時間だ！」

焦ったように声を上げる。梶原は自分の体格とキャラを理解しているのか、こいつは想像通りの野球部に所属していた。対する山下もパソコン部に入っている。

「じゃあ俺そろそろ行くな！」

「僕も行くことにするよ」

二人が鞆を持って、それぞれ別れの言葉を口にして、教室から早々と去っていった。教室は俺一人だけとなり、静けさを取り戻す。沈黙の教室にいと、なんだ、こんなにも教室って広がったのかと気づかされた。

「俺も行くかな」

重い腰を上げ、立ち上がる。

俺は二人とは違い、帰宅部だった。特に理由はない。強いて言うなら入りたい部活がなかった、それだけだ。それに家では一人暮らしということもあり、いろいろしなければならぬことがある。部活は入らなくても良いだろう、とこれも踏まえて結論を出した。そろそろ帰ろう。

俺は教室から出て、教室に背を向け歩き出した。

空は淡いオレンジ色。

水彩で色を塗られたかのような透き通った色をしている。

夕方になりつつあった。

遠くの空の上ではカラスがカーカーと鳴き、隣では電車が通過する音を響かせている。ここら一帯は田んぼや畑で見晴らしも良い。人通りは特になく、寂しそくに佇む電柱たちの横を俺は歩いていた。鞆を持った腕ごと後ろに回し、後ろで腕を組む。顔を上に上げて空を仰ぎながら俺はさっきの会話について思い出していた。

『それが何でも今回は……告白少女なんだってさ』

告白少女、ねえ。

この言葉だけ聞くに、なんだか可愛らしい感じがする。

しかし口裂け女やオオカミ男という話をしたものだから、なんだかゴツい感じでそれでいてホラーめいた女の子が告白してくるのかもしれない。想像するだけでシユールで、鳥肌が立った。確かにそんな奴がいるんだったら恐ろしいな…。顔全体を真っ白にして同じく真っ白のワンピースを着て、目が見開かれていて、口が大きく開かれていて……。恐ろしい。告白少女、恐るべし。できれば会いたくない。できなくても会いたくないぞ。だが幽霊なんている訳ないか。そんな考えをしていた時だった。

ある電柱の前にどこの学校か分からないがセーラー服を着た少女がぼんやりと立っていた。少し紫かった黒髪を肩くらいのショートにしている、それがふわりと風に小さくなびいている。幼い顔をしていた。子どもっぽいと言ったらいいのか。しかし電柱を背にして立って憂いでいる少女は絵になっていた。美しいのか、綺麗なのか、見ている俺には判断することはできなかった。しばらく俺は立ち止まる。

「！」

そんな俺のことを、こちらを見て少女は気がついた。そしてパタパタと小さく足を動かし近づいてくる。その様は犬かなんというか、小動物を思わせた。いや、可愛いという意味で。

はあ…はあ…と俺の前まで来た少女は息を整える。どんだけ走ってきたんだ。少しの間俺は待っておいでやる。息の調子を戻した少女は顔をぱっと上げた。なにやら決意したような顔をしている。俺と真正面から目を合わせた。心なしかその頬は少し赤い。

「あ…のっ…！」

少女は思い切ったように口を開いた。

「わ、私とつきあってくれませんかっ!？」

「……………」

いた。

告白少女は確かに、いた。

それも俺の目の前で、しかも告白をして。

二人の顔はオレンジ色に照らされている。鳥は空を飛んでいない。道にも俺たち以外人通りもなく、誰もいない。時間が止まっているようだった。この場所の存在だけが、世界から切り取られているようだった。異別で特別な、異様な光景。目の前で少女が恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら目を閉じている。胸の前で手が小さく握られている。その前に、俺は茫然と立っていた。これから始まることなど、思いもよらずに。

これがあいつとの初めての出会いだった。

夏の、ほんの少しの小さな物語の始まりだった。

その2

木にとまったセミたちの大合唱が辺りに響く。どのセミのたった一週間の命なのに、いやむしろそれだけの命だからこそ自分の存在主張をするように声を上げる。この公園の中から聞こえてくるのはそんな音たちだった。

だが今はそんな情景などはどうでもいい。今の俺の状況の方が大切だ。

今は何の時間か？

俺にとったら学校が終わり放課後になり、家に下校する時間だ。じゃあ今は一体どういう状況下にいるんだ？

……そんなの、俺の方が知りたい。むしろ教えてくれ。

俺は本日何回目になるかも分からないため息をついた。

「わー、ジューズです！ 懐かしいですっ」

横目で声の主を確認する。同じベンチで隣に座っている少女は、目をキラキラさせ、俺がそこにあった自販機で買ったジューズをしげしげと見つめていた。

……それ、ただのジューズだぞ。何にも珍しいものじゃないぞ。少女の嬉しそうな横顔を見て、もう一度ため息をする。どうしてこんなことに…？

俺は自問自答を繰り返した。

『そもそも俺がこいつに告白されたところから始まる。わ、私とつきあってくれませんかっ！？』

『……………』

聞いたとき、目が点になった。俺はまず、その少女の顔を確認する。前にどつかで会ったっけな…？ 可愛い幼顔にちょっと大きめの瞳。前髪は眉にかかるかからないかの微妙なラインの短さはだ色というよりどちらかと言ったら白色になるだろう肌の色。俺の肩くらいまでにしか頭が届かないことからするに、身長はかなり低め。どこのものが分からない学校のセーラー服に身を纏い、真面目なのかスカートの丈は膝より少し上くらいの長さ。見た感じ、分かるのはこのくらいなもんだ。そこで改めて考える。初対面、だよな……。今まで会ったことないな……。頭の中が疑問符で埋め尽くされる。一体何故俺は告白されたんだ……。？ ……あ、もしか今時よくあるつきあってくださいっ、とは買い物かどこかについてきて欲しい、というオチか？ うん、そうだよな。だって知らない人同士だし。きつと何かの間違いさ。一応確認を取っておこう。

『あのさ、それはどういう意味の？』
『？』

少女は閉じていた目を開き、少し首を傾げる。意味が伝わらなかつたようだ。もう一度説明するか、と俺が口を開こうとした時、少女が「ああ」と気がついたように声を上げた。次には俺に満面の笑みを浮かべる。

『もちろん彼氏になって欲しい、の意味です』

『……………』

うわぁ……。マジかよ…。

俺にとって初めての告白で、しかもこんな笑顔で言われてしまうと顔が火照ってくる。そりや中三だし、恋愛に疎い訳じゃない。一度はこういうの言われてみたいと思う。それが俺の場合は今だったのだ。……恥ずかしい……。どうしようもなく顔が赤くなるのが自分でも分かる。ええと、この場合はどうすれば……！ 俺は何か良い物はないかと顔を動かし、きよるきよると辺りを見渡す。そこで近くに人もあまりいない公園があるのが目に入った。

『あ、と、とりあえずあそこで話そうか』

言いながら指を公園に向ける。少女は指の先を目で追ってそして、
『はい、分かりました』

了承したと笑顔で頷いた。

さすがにただ話すだけなのもあれだろうと思ってそのついでにと俺は自分の分ブラス少女の分のジュースも自販で買ったのだ。少女にはペコリと頭を下げ、感激したように「あ、ありがとうございますっ！」とお礼を言われた。：まあ、喜んでもらえたらそれでいいか。公園の片隅にあるベンチに二人で腰掛ける。そんなこんなで今に至る訳である。

……………。

って俺何しちゃってるの!?

冷静に考えるとさ、俺何やってんの!?

なに普通に和んじやってるの!?

やらなきやいけないことあるよね、俺。確認しなきやいけないことがあるよね、俺。一人小さく息をつき、動悸を押さえる。大丈夫、大丈夫だ。冷静に対応すればこれくらいなんてこともないはず。：よし。俺は気を取り直して、嬉しそうに足をベンチから浮かせてブラブラさせながらほわわんとした笑顔でジュースに口をつけている少女に向き直る。

「? なんですか?」

俺のその動きに気づき、少女はきょとんとした顔でこちらを見た。うん、普通に可愛い。なんか俺が想像していた怖い図と正反対だ。：口裂け女とかオオカミ男とかとは全然違うじゃん。普通に可愛い女の子じゃん。……………。ええーい、こんなことで気にしてられっかあああ! そう吹っ切り、俺は少女を見た。

「あのよっ」

「は、はい」

気迫に押され、少女はおっかなびっくりに返事をする。俺はゴクリと唾を呑み、決意を固めた。

「何でその…、俺に告白なんかしたんだ？　俺たち、初対面だろ？」

「え、あ、はい。そうです、初対面です」

やや遅れて少女は首肯する。

「だよな。じゃあ何か？　どうして告白なんかしたんだ？」

「えっと、彼氏が欲しかったから、です…」

恥ずかしそうに目を伏せる。そこに俺は言葉を続けた。

「そこなんだよ。理由は彼氏が欲しかったからなんだろう？　つまり

彼氏になれば俺じゃなくても誰でもよかったのか？」

「それは、その……」

少女は言いづらいようで言葉を濁しながら、少し俯く。まるで悪役が少女を追い詰めているような気分になるが、この場合は仕方がない。ここをはっきりさせておかないと、話が掴めない。言い淀んだ少女はそのまま数秒固まる。俺がそろそろ自分からもう一度質問しようかと考えたとき、やっと少女は小さく口を開いた。

「……………が、……………からです」

「え？」

しかしその声はあまりにも小さかったため、聞き返す。少女は決心したように、今度は俺にでも聞こえる声で言った。

「つきあうことが、したかったんですっ……。そうしなければ、いけないんです」

言葉の最後が沈んだ。少女の言葉は自分の意志というより、むしろ義務、絶対のことにように聞こえた。自分の気持ちどうこうではなく、無理矢理なようなそんな感じを感じさせた。少なからず俺はそれに違和感を覚える。少女は自分の顔を少し上げて、俺の顔を覗いた。

「…えへへ」

そして寂しそうに声を絞り出すかのように笑う。見ている方が心が締め付けられるような笑顔だった。次に少女はちよつと躊躇いながら、とんでもないことを口にした。

「私、死んでるんです」

「……え……？」

俺は一瞬動きを止めた。

「何、て……？」

意味が分からず、聞き返す。

「だから私、死んでるんです。つきあいたいというのは、成仏するためなんです」

呆氣にとられ、口をポカンと開く俺。少女はこの会話は長くしたくはないのか、言いたいことを一気にまくし立てるように話す。

「誰でも夢ってありますよね。例えば宇宙飛行士になりたいとか、先生になりたいとか、とにかくいろいろです。私にも夢がありました。それはつきあうことです。好きな人と一緒に歩いたり、手を繋いだり、隣で笑ったり、してみたかったです。そんなことが、してみたかったです」

ここで少女は言葉を句切る。

「でも私にはそれが叶いませんでした。死んじやったからです。この世からいなくなったからです。それは自分の意志からではありませんでした。だから私には未練というか、したいことが残ってしまったんです。それが、人につきあうということでした。私は死んだのにもかかわらず、この世界にそれを理由に残されたのです。私が成仏するには、人につきあうことが条件となっていました」

「え……、話がいきなりすぎてついていけないんだけど」

頭が混乱する。意味が分からないという問題でもない。人が死ん

だ。未練があつたので幽霊になった。とてもじゃないが、はいそうですか、ではすまされない問題だ。そもそも俺は幽霊は信じていない。素直に頷ける訳がなかった。俺が正直に言うと、少女は弱く少し微笑む。自分でも自覚はあるのだろう。

「そもそもあんたは今こうして目の前で見えてるし、話せるし、実体もある。それがどうして幽霊なんかになるんだ？」

そう訊くと、少女はおもむろにベンチから立ち上がった。夕日を背にして立つ。そして俺の方に体を向けた。

「見て下さい。私の足下です」

「？……………あ」

訝しながらも言われた通りに目を向ける。そこであることに気がついた。普通の人なら誰でも持つていて、持つていないとおかしいそれが、この少女にはない。俺が言葉にする前に、少女が先に明かした。

「そうです。私には影が、ないんです。普通はないとおかしいんです。でも私は、この世に本当に存在している訳ではないから、ないんです」

夕日により存在がより濃くなる影。今この場に俺と少女の二人が居て、俺だけが地面に影を伸ばしていた。

「他にもあるんですよ。私、痛みや空腹は感じないんです。実際この一ヶ月くらいの間、何も食べてないです」

「……………」

「空腹に関しては立証するには時間がかかるので、ために痛みの方でしてみましようか？」

茫然とする俺と向き合い、少女は笑顔でとんでもないことを口にした。

「私を思いつき殴って下さい。そしたら、分かります」

「……………は？」

まさかそんなことを言われるとは思わなかったので、聞き返してしまった。殴って下さいだ…？俺は一応男だぞ？思いつき、

しかも女の子を殴るなんてことをしたらその子がどうなるかなんて……。だから自分からその提案をした少女の言葉を疑わないわけはなかった。

「どうしたんですか？ 試さないんですか？」

何も反応しない俺を見て少女は顔を覗かせる。顔には不思議という表情が映っていた。逆に俺はそんな少女が不思議すぎた。平然と言つてのける少女が異様だった。俺は返答に詰まる。確かに幽霊というものの存在は考えられない。あるはずがない。でもこの少女は本気で言っている。つまりそれだけ自信があるということなのか？ 体を張つて言うなんて滅多なことだからこそ、少女の言っていることは本当のことなんじゃないのか？ ……。しかも女の子を殴るなんて行為、したくない訳だし。しちゃったら俺、いろいろいけない気がする訳だし。そう自分に言い聞かせた。うん、しょうがないからここは話に合わせておいてやるとしよう。今はそれが一番な気がする。結論出した俺は、若干引きつった笑みを浮かべ、言つた。

「…いや、いいよ。分かった。君が幽霊だつて認めるよ」

「ほんとですか？ よかったです」

それに少女は嬉しそうに笑った。俺の言葉に満足したのか、よいしょと少女はまたベンチに腰を下ろす。いや、幽霊だと認められて嬉しいってどんな奴だよ……。

「信じてもらえてよかったです。いつも他の方々に言つてもわかってもらえませんでした。だからよかったです」

「……」

そりゃ、信じれないよなあ……。いきなり死んでるなんて言われても。ていうか俺もまだ同じ気持ちだし……。今その人たちの気持ち、凄く分かる。きっと話を聞いて困惑の表情を浮かべていたに違いない。

渡り鳥なのか数羽がまとまりになってオレンジの空の上を飛んで

いった。自分たちの真上にあつた雲もずいぶん風に流され、遠くに動いている。公園のジャングルジムや滑り台などの遊具たちの下に落ちる影も細く長くなっていた。

さつきから黙ったままだな……。少女は椅子に座ってから口を噤んでいた。笑っていた表情はどこかにいき、今は何かを考えているような難しそうな顔をしている。

「どうしたよ」

「……すみません、確かに言われた通り、私はつきあえるなら誰でもよかったのかもしれませんが……」

少女の口から出てきた言葉は、予期せず謝罪の言葉だった。どうやら思い悩んでいたのは、俺がさつき質問した、だれでも良いのか、に対する回答だったようだ。

おそらく少女は自分より他人を尊重するタイプの人間だ。自分だつて成仏したいはずなのに、他人の気持ちを読み取り考えてしまう。俺が困っていると思って少女はそう口にしたのだろう。俺は少女の顔を窺う。

「あ……」

その時少女と目が合った。戸惑ったように目の光が揺れた。が、少女は健気に俺に気を遣わせまいと、えへへと笑う。でもそれはあまりにも痛々しすぎた。見ていられなかった。今まで少女はここでいろんな人に勇気を振り絞って告白してきたのだ。しかしそれは自分が幽霊だ、とか馬鹿正直に話してしまうから結局いつも成功せず、に終わっている。変なことを言う女の子だからかわれたりもしたかもしれない。この子は毎回一生懸命話しても信じてくれなくて、でもそれでもめげないで頑張ってきて。泣きそうになったことだつてあっただろう。実際に辛くて、しだいに話しかけるのが恐くなつて泣いたことだつてあったかもしれない。それでも少女は諦めずに頑張ってきたのだろう。それを考えると、胸が熱くなった。目の前の女の子を助けてあげたいと、そう思った。

「しょうがないな……」

「え？」

気がついたら俺はもう言葉にしていた。

「俺がつきあってやるよ。おまえとつきあってやる。これでいいか？」

「…え？ えっと、その……」

俺の言葉が信じられないようで、少女は目をパチクリしていた。

「それはどういう意味で、ですか……？」

どうしても信じられないようだ。大きな瞳でこちらの意志を確認するように見つめる。……くそ、やはりここはきちんと言葉にしてやらなきゃいけないのか……。……よし。

「つまりだな、お前は今日から俺の彼女だってことだ」

ぐわああああ、言ってて自分が恥ずかしくなってきたのだが……！

顔に出てないことを切実に願うことにしよう。

しばらく少女はきょとんとしていた。でも数秒経ち、言葉の意味をようやく理解すると、忙しく慌て始めた。顔は俺のなんかと比較にならないほどの真っ赤な顔をしている。

「えっと、それはつまり……。あわわ……」

煙を放出することができれば、おそらく少女の頭からはプシューと勢いよく煙が出ていただろう……。というか慌てすぎだ……。少女はそうあわわしていたが、少し経つとやっと落ち着きを取り戻してきた。今は無言で椅子に座っている。まあ顔は赤いままなのだが。少女はすーはーと深呼吸をした。そして自分でよしと声を掛けて俺の顔を見る。

「…ありがとうございます。その…、とても嬉しいです」

言葉だけではなく、少女はほんとうにうれしそうに言葉を紡ぐ。目の端にはうつすら涙が滲んでいた。顔を綻ばせ、満面の笑みを浮かべる。こんな俺が言ったことなんかが嬉しいのか……。……よく分からない。でも俺は知らず知らずの内に少女の微笑みにつられて口元を緩めていた。

「あ、そういえば自己紹介がまだですっ」

笑い合って少しの間、少女が思い出したように声を上げた。慌てて俺に向き直る。

「私は木野小豆きの あずきです」

少女は名を名乗る。

「俺は佐々木淳さとう きじゆんだ」

だから俺も同じように自己紹介を返す。

それからしばらくの間、間があった。少女は目の前で照れ笑いをしている。朗らかに笑っている。次に少女は手を前に添え、

「よろしくお願いします」

そう言い、頭を下げた。俺も気さくな風に「よろしく」とだけ返した。

歯車が回り出す。

カラカラと動き出す。

今日のこの時から、俺たちは始まったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4653v/>

告白少女

2011年8月6日03時31分発行